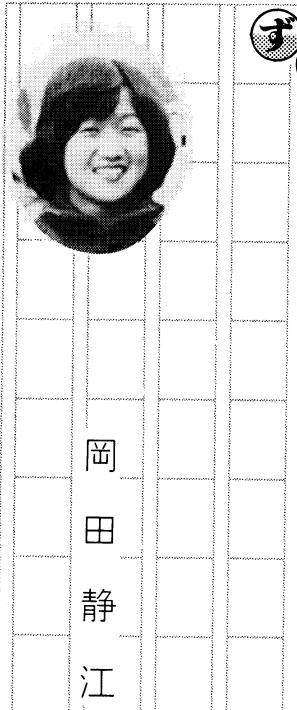


そ
う
す
り

一日一日をたいせつに



岡田 静江

自然界のすべてが新生の観を呈する

い。

ような春。このときの新学期は教師にとってもまた期待、決意など新たな思いがわくときであるが、転任したての新任者には多少の不安も加わる。さあどんな毎日が待っているだろうと、種々の思いで始業式前のひつそりとした校内のあちこちを巡つてみる。

しかし、始業式、入学式を終え、新学期特有の諸行事を経ていくうちに、ああやっぱりこれが学校の姿だと感ずる。生徒たちのいないときはなんど違うだろう。校内いたる所に若い姿が満ちている。職員室では新担任の先生がたが、忙しそうにしかし活気に満ちてキビキビと仕事をしている。周囲に活気があり適度の緊張感がある。そんな様子を感じているのは気持ちがいい

今年の新学期は特に忙しかったよう

だ。二年に一度の大きな催しである体育芸能祭が、時期を繰り上げて四月中に行われたからである。これは体育祭と同時に、古くからこの地方に伝わる芸能（田植踊り、御神楽、流れ山踊り、宝財踊り、剣舞）を練習して披露するものである。当日までに二週間余りしかない。この間に生徒たちは、今や地域の人々にとってさえ「なつかしいもの」となった踊りを覚え、太鼓や横笛の奏法を覚え、他に各種の競技の準備をするのだ。とにかくこの間は、その

私たち教師は、学校で毎日の生徒た

た。そこで、体育芸能祭は成功したのだつた。



体育芸能祭「流れ山踊り」

が体育芸能祭をめざして動いた毎日だった。

そうして、こうした毎日を積み重ねての芸能祭当日、衣装を整えて踊った踊りはどれも華やかだった。前日まで失敗を繰り返していた組体操は、当日全部成功した。このよだな姿に若さのエネルギーを見たが、それとはまた別に、あることが成功するには、それなりの過程があり、それは直前までの部分の積み重ねによるのだと誰もが感じたことと思う。目には見えなくとも、陰でどれだけ多くの人々が手を尽くしたことか。その細かな事が集結した。

私たち教師は、

学校で毎日の生徒た

く。

「先生お元気ですか。新入生を迎えて私たちも少しおとなになつたよう気がします。」

こんな文が見える。一人一人の顔が浮かび、今の目の前の生徒たちの姿と重なる。そうだ、あのころも何もかも新しい経験で、生徒たちは頼りなく書つただろうが、毎日夢中だった。そしてそんな一日一日が今日に、今の自分につながつていて。そして今日はまた明日へ、その光へと続していく。この一日一日をたいせつにしなければ

ちとのさまざまなかかわりの中で物を考え生活している。一人一人の言葉、行動に一喜一憂し、二度と繰り返されることはないことに面しつつ時を送ることはない。これは生徒も同じである。家庭で、彼らなりの種々のかかわりの中にいる。そしてその彼らの年代は、思考や情感が完成に向いつある時であり、今この毎日の過ごし方が今後の彼らの進む方向を決めるといえる時なのだ。あたりまえのことだが、これを生徒たちも深く考え自覚して欲しい。誰もが内面的に豊かになるべく、日々、向上心を持ち続けねばならない。